

334) 美しき恋人よ

夕立が自転車の 僕たちを追ってくる
砂浜の^{はいおく}廢屋で しばらくの雨宿り
雷に抱き合い 唇を重ねてた
^{ふるさと}故郷の砂浜の ひと時の思い出よ

東の間の喜びを もたらした通り雨
倅せの訪れに 僕たちは輝いた
雨がゆき日がさすと 荒海の向こうには
七色の虹が出て 秋空をまたいでた

倅せはいつだって 予期せずにやってくる
そしてまた悲しみも 突然にやってきた
恋人は世を去って 僕だけが残された
過ぎし日の悲しみが 鮮やかによみがえる

若き日の恋人は 永遠に美しく
若き日の^{まぼろし}幻は だんだんと遠くなる
美しき恋人よ 美しき幻よ
^{ふるさと}故郷の砂浜に 今日^{たたず}もまた佇んだ

美しき恋人よ 美しき幻よ
故郷の砂浜の 虹の日の思い出よ